

特集

都市の祝祭空間——都市祝祭空間論から都市空間整備へのアプローチ2

みちを活動舞台として計画した商店街

川原 晋

本稿では、祭り以外の事例だが、筆者が関わって、バザールやイベント活動の舞台としてみち空間を整備し、使いこなしている商店街通りの事例を振り返り、都市祝祭空間論から都市空間の保全・整備へアプローチするイメージを提供する。

山王商店街のまちづくりの概要

山形県鶴岡市の中心市街地に位置する山王商店街は、商店街が氏子となつている山王日枝神社と内川との約400m、約50店舗の商店街である。創業が明治期に遡れる歴史的建築物を残している店舗も少なくない。大型商業施設の参入や車社会の影響などで個店の売り上げは今も厳しい状況にあるが、1994年から始めたナイトバザールによる商店街活性化の取り組みの経験を活かして、商店街有志によるまちづくり委員会を中心に、市や大学の支援を受けながらまちづくりを進めてきた。

現在、山王商店街再生のため3本柱事業として、①バザールの舞台として「みち広場」をつくる街路事業(市事業、一部商店街負担)、②商店街有志が設立した山王まちづくり(株)によるテナントミックス事業(ゾーン整備事業)、③山王まちづくり協定・ガイドラインに基づく個店改修、を順次進めてきた(図1)。市の中心市街地活性化基本計画に位置づけられた①②の事業が2011年度に一部完了した、テナントミックス事業「さんのう夢ほっと」のオープンで、欠けていた飲食系4店舗の新規出店を獲得した。また、無電柱化と歩車道全面にわたる無散水融

図1 山王商店街まちづくりの基本方針 3本柱事業

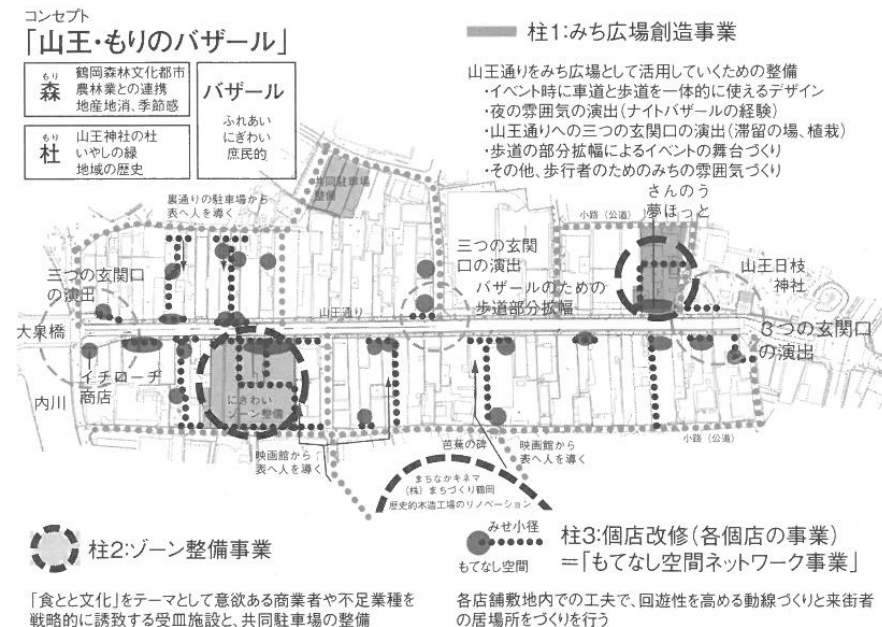


写真1 ナイトバザールの様子(街路整備前)

図2 拠点事業の空間イメージ：神社の緑や鳥居の顕在化を目標とした (NPO鶴岡城下町トラスト小野寺浩氏作画)



ンボル樹と縁台的ベンチを用意し、これまで通りなかった公共的な休憩の場を設けた。イベント時にはこの縁台はコンサートなどの舞台ともなっている。

みち広場の背景袖舞台としての町並み整備

活動拠点となる場のひとつ「さん」の夢ほつとの整備にあたっては、山王商店街の氏神であり、商店街の歴史を語る上でも重要な山王日枝神社の緑を、みち広場という舞台の背

景として引き立てることも重要な目標であった。無電柱化とあわせ、夢ほつと整備に関わる周辺建築の移転、建て替え時の建物配置により、神社の緑や鳥居を見えるようにした(図2)。また、みち広場の背景としては通りの町並みも重要だが、山王商店街では意匠としての町並みというより、通りの活動を支え、店の活動とつなぐ中間領域としての店先空間を「もてなし空間」と呼んで生み出そうとしている。街灯を店先の行灯照明として再整備したのもそのためであり、店で必ず買うつもりがなくても店に入りやすい仕掛けでもある。協定にもとづくデザイン協議やモデル作成をこれまで行ってきた。

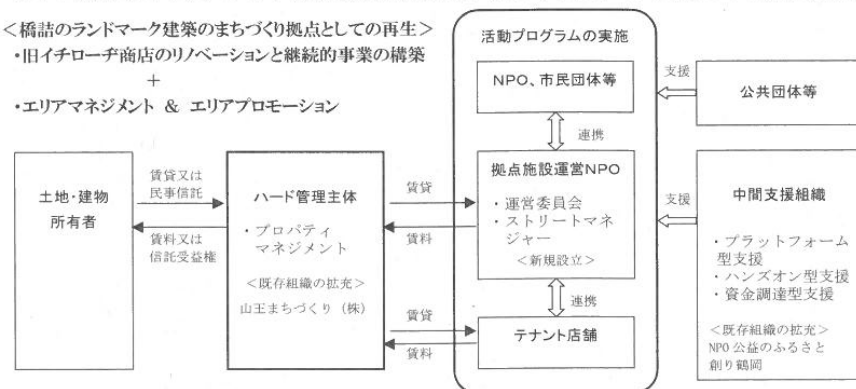
活動を支える組織——商店街の枠を越えた体制とプロモーション

こうした舞台を使いこなす組織も必要である。これには自らが活動を行う場合と、外部の人が活動をするのを支える場合の二つがあり、活動を拡大するには特に後者が重要である。ナイトバザールを長年実行してきた商店街が有する運営技術は、一

連の事業後はさらに発展している。平成23年度より、山王商店街では、周辺地区でまちづくりに取り組むNPOやまちづくり会社、大学と協働で、より広域的なエリアマネジメント&プロモーションに取り組んでいる。そのきっかけは、三つの玄関口の一つ内川の太泉橋の橋詰にあり、地域のランドマークとなっていた旧イチローチ商店の空き店舗化に伴う再生の機運であった。テナントミックス事業で実績のある山王まちづくり(株)が建物管理主体となり、NPO公益のふるさと創り鶴岡がソフト事業の運営主体となるというスキームができつつある(図3)。

この空き店舗を、商店街内外の様々な活動コミュニティが参画する地域まちづくりの拠点として、また、地域外への発信を意識した「プロモーション施設」として活用する取り組みが始まっている。マークやロゴを作成して、これまでバラバラに見えていたイベントを、地域の連続イベントとして構成しようとしている。これを運営する若手のストーリーマネジャーの育成も進行中であ

図3 「イチローチ・まち・川プロジェクト」の推進体制(案) ハードの管理主体とソフト活動をマネジメントする主体が設定された (インテグラルコンサルタンツ 鈴木進氏作画)



る。このように活動舞台としてのまちづくりはハード・ソフト両輪で進められているのである。

*1 川原晋「もてなし空間ネットワーク事業」商店街の個店改修計画の蓄積からの構想」日本建築学会大会建築デザイン発表梗概集、2011年7月

*2 鶴岡山王商店街のまちづくりについては、佐藤滋、川原晋他「まちづくり市民事業」新しい公共による地域再生(学芸出版社)に詳しい。

雪道により、冬でも除雪車による雪だまりのない道に生まれ変わり、バザール・イベントの場としての「みち広場」機能の強化につながった。その結果、拠点施設以外でも、新規出店者もあり空き店舗もほぼ埋まった。若い世代が商店街に加わり、まちづくりに参加しているのは特筆すべき点である。

活動実績から「みち広場」の形をイメージ

みち広場での活動として想定したのは、ナイトバザールのときの商店街の様子である(写真1)。店舗前でのワゴンセールその他、歩道では外部から露店が出店し、市民によるフリーマーケットが行われ、神社境内や空き店舗ではコンサートや子供が楽しめる様々なイベントが行われる。また、年1回、歩行者天国となるときには踊り祭り「おいやさあ」の舞台となる。こうした活動を強化し、市民がこの通りで何かをさせてほしいと要望が来る空間と、これを支える組織を作ることが目指された。これにより商店街を今一度地域

の関心が集まる場とすることで、その結果、意欲ある出店者を呼び込み、既存店の活性化にもつなげるのである。

計画した活動舞台と配慮装置

山王通りの街路事業は、市の財政難のなかでも事業に着手するため、建物補償費を必要としない現道幅員11mでの事業とし、わずか1・75mの歩道におかれていた電柱や街灯等は埋設や裏配線、民地に移動させ、車道を狭めて歩行空間を可能な限り充実させた(写真2)。まず、道全体を広場として利用できるように、歩道・車道の段差は5cmとセミフラットとした。そのために必要となつた歩車分離のポラードは、もてなしの気持ちを出すフラワーポットと、バザールの時のような賑わいを演出するのほり旗を組み込む「イベント配慮装置」としてデザインした。イベント時にのほり旗を電柱などにくくりつけるのは決して景観上美しいものではないので、当初から通りを演出するアイテムとして、神社の参道の雰囲気も想起でき

るように旗も一体的にデザインしたのである。現在、平時、ナイトバザール時ののほり旗、連携してまちづくりをしている「まちなかキネマ」ののほり旗など、4種類の旗が頻繁に差し替えられ、常に通りで何かが起こっている雰囲気をつくりだしている。

さらに、通りの中でも四つの場所を特別な活動舞台として計画した。第一に、すでにセットバックがほぼ済んでいた片側約150mの区間だけは道路幅員を拡幅し、歩道を約6mとしてバザールを行うための場所とした。ここに予め露店用テントの設置用の穴を設け、テントを特注した。また、ばらしたテントのフレームや幕をしまふ場所を、隣接する「さんのう夢ほっと」内に設け、イベント支援空間としての機能も持たせた。これらは、テント設営の大変さや鶴岡特有の強風に弱かったのを改善し、露店設営が容易にかつ整然とできるよう議論した結果である(写真3)。

残り三つは商店街の玄関口となる場所である。このうち2カ所にはシ

写真2 山王通りみち広場街路のイメージ
模型…車道を半たわみ舗装で石畳風にするのは、一部のみ実現した



写真3 「さんのう夢ほっと」前歩道の露店とのほり旗を組み込んだポラード。奥には神社の緑が映える。

